『蒙求和歌』第三類本　本文〈二〉

――恋部から述懐部まで――

阿尾あすか・小山順子・竹島一希・蔦清行
中島真理・濵中祐子・森田貴之・山中延之

はじめに

本稿は、本誌前々号（『京都大学國文學論叢』二十七号（二〇一二年三月発行）掲載の「『蒙求和歌』第三類本　本文〈一〉――四季部――」の続稿である。

前稿でも底本として使用した山口県立山口図書館蔵『蒙求和歌』の原本を実見する機会を得たので、以下に略書誌を記す。

【書誌】『蒙求和歌』写本二冊（所蔵番号 142）

本書は、現在賀茂別雷神社三手文庫に所蔵される今井似閑本の伝写本であり、毛利藩の藩校明倫館の開設にあたって、今井似閑が所蔵する典籍類を借り受け、元文四年（一七三九）ごろまでに書写されたものである。

原装（上下とも縦 25.5 ×横 20.5 糎）、焦茶色表紙、楮紙袋綴、表紙左肩の原題簽に「蒙求和謌 上」（上巻）「蒙求和謌 下」（下巻）と書す。上下巻とも墨筆による「辰九十」と打付け書あり。上巻のみ朱筆による「八門乙の六」と打付書きもあり。遊紙一丁、本文は、二丁オモテより始める。二丁オモテ上部には「明倫館印」の蔵印および「安政七改」「明治十四年改」の調査印を捺し、巻末の遊紙ウラ中央にも「嘉永三改」の調査印を捺す。下巻のみ最終丁ウラ末尾に「蒙求和歌畢」とあり、巻末の遊紙ウラに「権中納言花押」との墨書あり。これらは原本の三手文庫本にも存し、それをそのまま承けたものである。

本文は一面十行、漢字平仮名交にて書す。巻七までを上巻に、巻八以降を下巻に収録するが、巻が移る箇所では丁を改め、次丁オモテ一行目より「蒙求和歌第二」のように記す。本文には朱筆による注が施されており、『明倫館国書分類目録 付 今井似閑本目録』（山口大学人文学部典籍調査班・平成四年）所収「今井似閑本の解説」によれば、山口図書館現蔵の今井似閑本の書写は「書写は数人の能筆家の手になり、和歌・和文は草書体、漢文は楷書体で写され、朱墨注・考異・訓点・奥書等の全てが原本と同一にされている」という。試みに、国文学研究資料館蔵マイクロ資料により三手文庫蔵今井似閑本『蒙求和歌』と比較したが、注記等には、わずかながら差異も見られる。また山口図書館蔵今井似閑本は、他の典籍もほぼ同じ体裁で書写されており、一丁の行数などは原本とは異なっている。

山口県立山口図書館蔵今井似閑本の詳細については、石川卓美「長藩明倫館の今井似閑本傳寫に就いて」『防長史学』七-二（昭和十一年十二月）、「防長に傳わる契沖資料今井似閑本目録・解説」『山口図書館叢刊』第三冊（山口県立山口図書館・昭和三十一年十一月）および『明倫館国書分類目録 付 今井似閑本目録』（山口大学人文学部典籍調査班・平成四年）掲載の解説を参照されたい。

【凡例】

一、底本は第三類本に分類される山口県立山口図書館蔵『蒙求和歌』（所蔵番号142）を使用した。

二、翻刻凡例

・翻刻は底本ままを原則とし、合符以外はそのまま翻刻した。

・濁点、句読点を私に付し、漢字は通行のものに改めた。

・見セ消チ前の本文は〈　〉内に記し、その右に訂正後の本文を傍記した。

・底本の頭注は**【頭注1】**のように注記し、和歌のあとに掲げた。割注および傍記も複雑な場合は、**【割注】**・**【傍記】**のように注記し、あとに掲げた。

・ルビの訓点は（　）内、ルビのルビは〔　〕内に記した。頭注・割注内もこれに準じた。左ルビは（左：）とした。

・判読不能な箇所は、□を記し、推定本文を（　）内に傍記した。

三、読者の便を考慮して、以下の処理を施した。

・各段の冒頭に、通し番号と蒙求標題（明治書院新釈漢文大系『蒙求　上・下』による）を掲げ、同蒙求標題番号（〇）のように記す）を補った。

・和歌は、一類本（平仮名本）由来のものには、**（平1）**、二類本（片仮名本）由来のものには、**（片1）**のように、それぞれ新編国歌大観による歌番号を付した。完全には本文が一致しない場合、**（片1）**）のように記した。

四、**【校異】**として、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本（国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料（ヤ3-6-4、C3700）に拠る）との対校を行った。ただし、本文における有意の異同のみを注記した。

五、翻刻・校異は次のような分担で行った。

阿尾あすか……72～80
小山順子……81～90
竹島一希……91～100
蔦清行……101～110
中島真理……111～120
濵中祐子……121～130
森田貴之……131～140
山中延之……141～150

担当箇所は相互に点検を実施した。従って、翻刻・校異については、執筆者全員がその責を負うものである。

本文と校異（前々号続き）

蒙求倭歌　第五

恋部廿首

紀瞻出妓　宿瘤採桑　詰紛（汾）（こ）興魏

楚荘絶纓　無塩如漆　文君当壚
雍伯種玉　盧充幽婚　衛后髪鬢(一)
飛鸞体軽　班女辞輦　馮媛当熊
董永自売　買妻恥醮　龐倹鑿井
陳平多轍　孟光荊釵(三)　韓寿窃香
斉后破環　宋女愈(四)謹

【校異】
(一)紛(汾)――汾〈岸〉
(二)鬢(髪)――鬢〈岸〉
(三)釵――叙〈岸〉
(四)愈――逾〈岸〉

72紀瞻出妓〈三〇四〉

旧荘紀瞻出妓

尚書、紀瞻が家にあまたの妓女ありけり。王導、周顗及諸の朝士ひきつれて、紀瞻が家に行にけり。紀瞻、妓女をさま〴〵に餝とゝのへて、取出てけり。歌舞の曲を施にのぞみて、人の心をうごかさずといふ事なし。其中に紀瞻が愛妾あり。みめ形、こゝのにほひより始て、心ざまに至るまで、群にぬけてみえけり。周顗、是にこゝろをうつして、よその人のとがむばかりになりにけり。(左：アルジ)主紀瞻がみるところをもはゞからず、人目に恥る心もうせはてにけり。有司、周顗がとがあるべき由を奏申せども、勅してゆるされにけり。

おもひあまり色にいづるもとがならばあはでも恋に身をぞかへまし（片68）

【校異】
ナシ

73宿瘤採桑〈二六三〉

古列女伝宿瘤採桑

宿瘤は斉の東郭の女也。頸(一)にしゐねあるゆへに、宿瘤と名づけゝり。閔王遊に出て、東郭にいたり給に、里人(百姓本)悉く走りさはぎ見たてまつりに(二)、宿瘤、桑の葉を取て、よこめもせざりけるを、王ちかくよりて見給に、なまめき、よしあるさまにて、顔をあかめて恥じらへるさまなり。人ごとに王を見たてまつりに、宿瘤、身をうごかす事なき故をとはるゝに、我父母、桑をうれと(三)云つれば、桑をとり侍也。王を見たてまつれとはいはざりつと答申に、いかにもゆへあるべき物とおぼして、車に召のせらるゝに、我父母、内にあり。こゝよりめされてまいらむ事は、奔女に似たり。後に、とのがれ申に、おくぶかき心を恥て、いとゞ心をうつし給つ。さて還給て、黄金百鎰(イツ)(四)を遣てむかへ給に、父母、おほきに驚て、湯あむじ、あたらしき衣をきせんとするに、我この質にて王にみえたてまつりぬ。あたらしき衣をきて、見しられたてまつらぬこともぞある、とて本の姿にてまいりぬ。みなれ給にしたがひて、心の色をめで給て、后にたちにけり。

つゆふかくゝはとる袖(桑)のなごりをぞかへるそらなくおもひをきける（（片69）・（平62））

【校異】

（一）頸 ―― 項（ウナン）〈岸〉
（二）見たてまつりに ―― 見たてまつるに〈岸〉
（三）うれと（とカ） ―― とれと〈岸〉
（四）鎰（イツ） ―― 鎰（左：羊質及二十兩日一）〈岸〉

74 詰汾興魏〈九一〉

北史 詰汾興魏

魏の武帝の諱は詰汾也。昔数万騎をひきつれて山沢に出て畋（カリ）し給ところに、俄に輜軒（天女乗車）の天より飛くだれるありけり。近くよりて見給に、〈は（い）〉ひしらず（一）形よき女あり。帝、怪み問給に、答て云、我は天女なり。命をうけて来れるなりと云。帝、心にあやしと思ながら、世々の契にまかせて、旅の床によを（二）あかしたまふに、気色ことがらより始て、心ざまゝでこの世の人の類にあらず。うちつけにかぎりなくおぼしけり。一夜の夢よりもあやなくて、五更已にあけなんと（三）するに、あかぬなごりせんかたなく、したふ思ひたへ忍ぶべきにもあらず。又こむ年のけふとばかりいひをきて、雨のごとく風のごとくにして、別去ぬ。帝、この後心そらなるながめにあかしくらし給に、去し年の今日にもなりぬれば、又山沢にみゆきあり。時のをしうつるも心もとなくまたれ給に、天女一人の男子をいだきて来れり。これは、君の子也。子孫世をかさねて帝王となるべしと云。帝いだきとり給てむつごともつきぬに、還去ぬれば（四）、あさましくあやなくおぼしけり。始祖神元皇帝（五）と聞えしは、此小児の事なり。

なでしこのゆくすゑとをき色みればわかれし花のかたみなりけり（片70）

【校異】

（一）〈は（い）〉ひしらす ―― いひしらす〈岸〉
（二）よを ―― よ〈る〉を〈岸〉
（三）あけなんと ―― あけなと〈岸〉
（四）つきぬに還去ぬれは ―― つきぬ（に還去ぬ）〇れは〈岸〉
（五）始祖神元皇帝 ―― 始祖元帝（シソケンテイ）〈岸〉

75 楚荘絶纓〈三七六〉

説苑 楚荘絶纓

楚荘王、夜、群臣をあつめて酒をすゝめて遊給に、灯の風にきえたるひまをえて御傍なる后の袖をひく人ありけり。后其人の冠の纓を取て、我そでを引人あり。灯を挑て纓なからむ人をとがめ給へと申に、王もとより人をあはれぶ（一）情ふかき心にてそのとがをなだめむために、人をすゝむるには酒をもてす。人を責るには礼をもてす。こよひ灯をかゝげざるさきに、人〳〵みな纓をとるべし（二）と仰られければ、各纓を取てたてまつるけり。さて后の袖を問ける（三）人もまぎれにけり。心ひとつにこそおもひしりにけれ。其後晋のいくさ、楚をかたむ（四）ことい（左：〇）へ（左：〇）く と云かずをしらず。楚の軍の中に只一人ほこをあげて、抜いでゝ戦ふものあり。すなはち晋の軍をやぶり〈て（つ）〉（五）。王あやしみ問給に、そのかみ后に纓をおられたりし（六）人なりけれ（七）。身をすてて王のなさけを思しりにけり。

たれとしもわかでやみにしともしびぞ心にきえぬなさけなりける（（片71）・（平69））

【校異】
（一）人をあはれふ ―― 人〇あはれ〈岸〉
（二）とるへし ―― とるへし〈岸〉
（三）問ける ―― 引ける〈岸〉
（四）かたむ ―― かこむ〈岸〉
（五）やふり〈て〉 ―― やふりつ〈岸〉
（六）おられたりし ―― とられたりし〈岸〉
（七）なりけれ ―― なりけり〈岸〉

76 無塩如漆〈五六一〉

古列女伝 無塩如漆

斉の鍾離春は無塩邑の女也。醜き事たぐひもなかりけり。頭はうすに似たり。目ふかく、臂なが（長）く、ふしふとく、鼻たかく、喉むすぼられ（一）、うなじこゑ、髪すくなく、胸出、腰おれて、膚はうるしのごとし。四十（二）になるまで夫なかりけり。市に出ておとこを買とも、目かくる人なし。思ひわびつゝ宣王に参て、后にそなはらんとのぞみこふに、誠にうとましく、おそろしき気色なりけれども、情深き御心にて、これを獣はゞ徒に成はてむ事を哀び給て、人はわらへども、后にたて給てけり。（左…〇）無塩、台に侍て、殆哉と四度いへり。宣王、其故を問給に申て云、西には秦と衛とのうれへあり。南には強楚の敵あり。外には三国の難あり。内には奸臣ありて衆賢すゝまず。一旦に山崩れ、社稷しづかならず。是一の殆也。次に漸台五重をかざるとて、万民疲にけり。是二の殆也。次に（三）賢は山林にかくれ、讒臣左右にこはくして、諫者なし。是三の殆也。次に耽酒沈湎して以夜継昼、女楽倡遊して縦横無度、是四の殆也と申せり。於レ是宣王、此ことはりをおぼし知て、無塩が詞に随て、漸台をとゞめ、女楽をやめ、讒臣をしりぞけ、直諫をすゝめ、四（四）門を開て衆賢を納て、世〈を〉さまりにけり。

いろなくてさかりすぎぬとみるほどになだかくなりぬ秋のみやま〈に〉（五）（木）（片72））

色なしとながめし秋の深山にも心の月はありあけの空（平65）

【校異】
（一）むすほられ ―― むすほゝれ〈岸〉
（二）四十に ―― 卅（四十イ）に〈岸〉
（三）次に ―― 次に〈は〉〈岸〉
（四）四 ―― 〈安〉（四）〈岸〉
（五）みやま〈に〉（木） ―― みやま木〈岸〉

77 文君当壚〈二八〇〉

前漢 文君当壚 蜀都人也

文君は臨卭の富人、卓王孫が女、美人也。眉は遠山かとおぼえ、瞼は芙蓉に似たり。常に心をすまして琴を引けり。時に司馬相如と云ものあり。家貧しけれども、文道に賢く、管絃に名をえたりし人也。相如、卓王孫が家に行て、文を談じ琴を引けるに、文君めでゝ、心をそめてけり。遂に相如にあひにけり。相如、文君と共に成都〈人〉（一）かへりにけり。家をみれば、庭は蓬にとぢられ、のきはしのぶにうづもれて、わづかに四壁のみぞありける。文君とかくして世をわたりて、貧き事をうれへず。ふた心なかりけり。おやはらからは、大にうけぬ事に思て、宝にはあきみちたれども、いかにと問事もなく、おもひすてゝすぐ

しけり。相如、車騎をうりて(二)、其価をえて、文君と共に臨卭に行て、一の酒舎を買て酒をつくりて、まちに出て売けり。文君は壚をまもりけり。相如は着二犢鼻褌ヲ一(三)、滌レ器ヲけ り。卓王孫、是を恥て、杜(オサイテ)レ門いでず。諸公(本)(四)、卓王孫にあひて、汝、相如がまどしきをいとふ事なかれ。人の世にある、財にとめるをばうやまはず、道にとめるを貴とす。相如は道に長ぜるゆへに、うやまふところふかし。貧きをあなづりて恥るところなかれと諫けり。時に僮僕百人、銭百万(万貫本)をあたえて、成都へかへしやりてけり。子虚賦をつくりて、○(公)にたてまつるに、帝、しきりに讃給て、拝して為郎、重て文園令と成ぬ。常に病のみと云て、閑居を好みけり。

壚字、本作レ盧也。酒盧は酒を売所也。酒を火にあたゝむる物にはあらず。

板まより月をもふたりながむればあれたる宿もさもあらばあれ（**片73**）

ことのねの身にしむ秋の夕風ぞあれたるやども心ひきける（**平66**）

【校異】

（一）成都〈人〉 ―― 成都へ〈岸〉

（二）うりて ―― う〈ち〉て〈岸〉

（三）着二犢鼻褌ヲ一 ―― 着二犢鼻一〈岸〉

（四）公(本) ―― 隻〈岸〉

78 雍伯種玉〈五〇三〉

搜神記 雍伯種玉

雍伯は陽(羊本)公が字也。常に美漿を儲て道行人に与て三年をへけり。人来て漿をのみをはりて懐より石子一舛を出してあたえて云、是なむ玉の種也。まきてよき玉をうべし。又かほよき女をうべしと云て去ぬ。陽(羊本)公是をうへて玉田とす。時に北平の徐氏といふ人、おほきに富て家に好女のいまだとつがざるあり。陽公行てこふに、徐氏咲て、玉を一双えさせばあたえむと云けり。陽(羊本)公すなはち玉田の玉をあたえけり。徐氏おどろきてむすめをあはせてけり。夫(一)北平の陽(羊本)氏は是(其)○後也。

手にくみしゝづくのするのしるべかなつゐにあふせのいでの玉みづ（**片74**）

手にくみし人のしるべを思ふにもあふせうれしきいでの玉水（**平67**）

【校異】

（一）夫 ―― いま〈岸〉

79 盧充幽婚〈一八四〉

旧註引孔氏志怪目 盧充幽婚

漢の盧充は范陽の人也。城の西(四本)三十里、崔少府が○墓(女本)(一)あり。盧充行て狩しけるに、一の麞(クシカ)を追て○少府が(朱門官舎をみるイ本)(二)舎にいたりぬ。人ありて(三)盧充をよぶ。即崔少府也。語て曰く、汝が亡父、われに書を送て、我おとむすめを汝にあはせよと書けりと云て、書をみせしむるに、まことに我亡父の筆なりけり。すなはち東の廊(厢本)に盧充を入て、むすめ崔氏をあはせてけり。打つけにおもはしくなりにけり。かくて三日ありて別なむとするに臨て崔氏が云、我すでにはらみたり。もし男子をうめらば汝にあ

たえむ。女子をうめらばとゞめて育べしとて(四)泣〳〵別去ぬ。其後三年をへて三月三日、盧充水の辺に出て遊ぶところに、牛かけたる車の、波のうへにうきぬしづみぬするがちかく来て、岸の上にのぼるあり(五)。崔氏と三歳の児と共にのれり。児をいだきて盧充にかへす。詩一首金椀一枚とをそへたり。盧充これをうけとる程なく車も女もうせぬ。小児ひとゝなりて後、数郡の守たりき。盧充車に乗て市に出て、金椀を(六)いつはりうらせて見しれる人を窺はしむるに、卑き女これを見て走かへりぬ。即あるじとおぼしき女をぐしてきたれり。あるじ此金椀をみて伝へえたりしおこりを驚とふ。重て云、崔少府が女ありき。我はそのをばなり。いまだとつがずして命終りにしを、おやはらからおしみ痛み、第一の金椀を棺に入たる事ありき。即此金椀也。又云、盧充が家に来て尚しいとふ。始よりの事をかたりきかせて児を出してみせしむるに、此児崔氏が形につゆたがふ所なし。他界より来り嫁げる事を哀び悲びて、いひもあへず泣けり。崔少府(七)がこといまだ詳ならず。崔少玉が事ともいへり。おぼつかなし。

あさからぬ契はさてもありす川おなじ世にだにすまぬ身なれば〈片75〉

【校異】

(一) ○女本墓 —— 墓〈岸〉
(二) ○朱門官舎をみるイ本少府か —— 朱門官舎をみるイ本少府か〈岸〉
(三) 人ありて —— 人あて〈岸〉
(四) とて —— と云て〈岸〉
(五) のほるあり —— のほれるあり〈岸〉
(六) 金椀を —— 金○椀を〈岸〉
(七) 崔少府 —— 崔〈氏〉少府〈岸〉

80 衛后髪鬢〈三七一〉

前漢 衛后髪鬢 鬢異本

漢の武帝の衛皇后、字は子夫。髪形すぐれたり。本は平陽公主の家の歌うたひなり。帝、公主の家をすぎ給に、子夫が音のいろにめでゝ車にとりのせて帰給にけり。公主いだしたてゝうしろを撫て云、御志ふかゝらん(一)後に我をわするな、とぞ聞えける。後に后にたちて三男一女をうみてけり。時の人の諺に云、男をうみてもよろこぶことなかれ。女をうみてもいかる事なかれ。衛子夫をみずやとぞ云ける。

なをざりにおもひそめてしくろかみの心ながくやむすぼゝれける〈片76〉

【校異】

(一) ふかゝらん —— ふかゝ給ん〈岸〉

81 飛燕体軽〈三七二〉

前漢 飛燕体軽 燕本

趙の飛燕は河陽公主の家にて歌舞を習き。一たびかなで一たびうたひ、哀をほどこし涙を催さずと云事なし。其体軽くして舞の質にたれるゆへに、飛燕と名づけゝるなり。歌舞の曲のみにあらず、みめかたち、心ざま喩えんかたなかりければ、公、忍かよひ給ひけり。ぬいものゝかたびら、鴛の衾、亀の文の枕あり。終に后に立にけり。女弟あり。昭儀とす。みめかたち、ほと(左ノ朔)ン

ゞ(一)後宮を傾くり(二)程になむありける。
ふるさとのねぐらいでける程もなく雲井はるかにとぶつばめかな（片77）
つばめとぶ人の旅ねをあはれとぞながき秋まで思しりける（（平69））

【校異】
（一）ほと（左：殆）ゝ ―― ほとゝ〈岸〉
（二）傾くり ―― 傾くる〈岸〉

82 班女辞輦〈二五六〉

前漢 班女辞輦

班女は孝成帝の婕妤也。女なれども賢才通弁なりければ、公ことに御志ふかゝりけり。昔、同車に乗られけるを恐れ申て云、古の図画をみるに、賢聖(一)の君は名臣傍にあり。みるところはづかしかるべし。三代(二)のすゑに女嬖(嬖女本)ありき。其ためしにならじと思へりと申ければ、帝も弥心の賢き事をほめ給けり。時の后もところをおける事を悦て、いにしへは樊姫ありき。今は○婕妤(班本)(三)ありとぞ美られける。後に趙の飛燕、婕妤を讒して云、婕妤邪を挾て呪詛(祝本)すと申せり。公け問給に、のべ申て云、妾きく、死生有レ命、富貴在天、修(メタレドモ)正ヲ尚未レ蒙レ福ヲ、為(シテ)邪ヲ欲以(四)何望(ント)一レ(使本)、〈且〉(五)鬼神有レ知、不受二不臣之訴(訴本)一ヲ、如(モシ)レ其レ無(ハ)レ知(コト)、訴(訴本)トモ之何ノ益(カアラン)と申す。公け、此詞をよみして哀び美給て、金百斤を給ひけり。
さきだちしみちのためしをひくからにのちのくるまものりをくれにき（片78）

本ノマヽ、よりける(六)あだをためしにひきてこそおなじ車にのりうかれしか（平70）

【校異】
（一）賢聖 ―― 賢〈才(聖)〉〈岸〉
（二）三代 ―― 三〈代(ねん)〉〈岸〉
（三）○婕妤(班本) ―― 婕妤〈岸〉
（四）以 ―― ナシ〈岸〉
（五）〈且〉(使本) ―― 且ク〈岸〉
（六）よりける ―― うかりける〈岸〉

83 馮媛当熊〈二五五〉

馮媛当熊

馮媛は馮奉世の女、馮昭儀也。元帝御志ふかゝりけり。元帝けだものを戦かはしめて見給に、昭儀御傍に侍りけり。時に熊たけりいかりて御殿にのぼらむとす。人皆にげはしる。昭儀ひとり熊に立むかへり。熊すゝみかゝりて昭儀すでに害せられなん(一)とすれども、身をまかせて立むかへりけるを、そばより人よりて熊を殺てければ、昭儀はからざるにたすかりにけり。公けあやしみて問給はゞ(二)、人皆熊におそれはしる。汝(女)○の身としてしかも熊にむかへる事を問給に、答申て云く、妾聞く、猛き獣は人をみてとゞまるといへり。人皆にげ走ぬ。妾熊にむかはずは、熊きみを害してむ。妾熊にむかはゞ、熊妾を害して君はまぬかれ給なむと思て、立むかへりつるなりと申に、帝いよ〳〵ほめ哀み給て、ます〳〵をもくおぼしけり。
みくまのゝあらいそ浪にしほれましうらのはまゆふたちへだ

てずは

【校異】

（一）害せられなん ―― 害〈を〉（せ）られなん〈岸〉

（二）給はゝ ―― 給いて〈岸〉

84 董永自売〈二七二〉

旧荘漢 董永自売

董永いとけなくて〈毎〉（母）（一）にをくれて家貧しかりければ、田を作て世をわたりて一人の父を養ひけり。父のひとり家にあらむ事を心ぐるしく思て、小車にのせて田の辺にぐして行て、木の下かげにすへて、みづから田を作りけり。父死て後、思ひわびつゝ、身をうりて一万の銭をえて、わざの事を終て、かへる道に一人の女にあへり。みめかたちいひしらずたぐひなきほどなりけり。女すゝみていひよりて、董永が妻になりて、一月にかとり（縑本）三百疋をおりて、身をうりし直をつぐのはせて、董永をうけいだして、家にかへりすみて、一子を生てけり。仲舒と云。後に、我は天の織女也。天帝、汝が孝養の志を美て、身をうりし直をつぐのはせんためにつかはして、契をむすぶといへども、下界に久くすむべき身にあらずと云て、泣〳〵わかれさりにけり。

はゝきゞのあとをとはれぬ身なりせばひとりふせやにしづみはてまし（片80）

【校異】

（一）〈毎〉（母） ―― 母〈岸〉

85 買妻恥醮〈二二七〉

前漢 買妻恥醮（樵カ）

朱買臣、本は会稽の人也。家貧くして、文道を好みたのしむ事、をこたる時なく、其ひまには薪をこりて世をわたりけり（一）。買臣が妻、よのわびしさにたえかねて、暇をこひて別なむと云を、我、四十（五本）より富さかゆる事あるべし。すでに卅九（四十余）になれば、ことしばかりをまち見よ、といひこしらへけれども、きかずして去はなれにけり。さすがに年ごろにもなりにければ、とにかくにしたはしく思れども、かひもなし。さて次の年、買臣が文道に賢き事をほめて、武帝召て、まづ侍中に拝て、次に会稽の大守にうつされぬ。又富貴にして故郷に不レ帰者衣レ錦（綉本）夜行がごとし。汝、今已に旧里にいたるべし、と聞えければ、跪てかしこまりけ〈り〉（れ）ば（二）、任に赴く時、さきの妻、あやしのしづの質（男敝ま）さで（三）道を作りけり。是をみるに、目もくれ心もきゆる心ちして、よびて見れば、いふばかりなくやせおとろへて、ありしにもあらずなりにけり。女、はじめには思よらざりけるが（四）、よく〳〵かたらひわたるまゝに、昔の買臣と思ふより、はづかしさのあまりに、倒ふしてやがて死にけり。

恥醮は改レ醮を恥る也。昔日、皮京が妻（五）竜氏、皮京にをくれて後、躬者おほけれども、心に〈あ〉（ち）かひて（六）不レ改レ醮といへり。又馬元正が妻尹氏、元正にをくれて心ならず玄盛にとられにけり。再醮をうれふるあまりに三年ものいはざりけり。

まてといひしはるにもあはでかれにけりのちの心ははづかしのもり（心の花はイ）（片81）・（平72）＊異本注記も（片81）・（平72）

【校異】

（一）わたりけり ―― わたりける〈岸〉

（二）かしこまりけ〈り〉は ―― かしこまりけり〈岸〉

（三）しつの質（男戴ま）さて ―― しつの質にて〈岸〉

（四）思よらさりけるか ―― 思よらさりける〇（か）〈岸〉

（五）皮京か妻 ―― 皮京の妻〈岸〉

（六）心に〈あ〉かひて ―― 心にちかひて〈岸〉

86 龐倹鑿井〈四二一〉

風俗通 龐倹鑿井

龐倹は魏都の人也。昔よのみだれにあひて、父のゆき方をしらずなりて、母阿宏にしたがひつかへて廿年をおくりけり。龐倹、廬里（廬本）にすみて井をほるに、銅の銭十万をほりいでゝ、家豊になりて、奴を求るに、ひとりの翁をかいえたり。家の内につかはれて、日数へて後に云、堂上の母はこれ、昔の妻たりし人也といへり。母、其故を尋聞に、かさねて云、汝は荵氏（艾本）の女、字は阿宏、左の足のしたに黒子あり。右の腋のしたに赤痣（疑）（左：本同）誌あり。如レ半櫛と云へり。母の云、まことに我夫なりけり。即、昔のごとく夫妻となりぬ。時の人の云、廬里の龐公（一）、鑿テ井ヲ得ニ銅（左：本ナシ）銭ヲ、買レ奴ヲ得レ翁ヲ。

へだてこしむかしのかげをならべしはほりかねの井のあるじなりけり（片82）

あひみてもなをこそ人となりなまし心ぞと〈り〉の（し）しるべなりける（（平73））

【校異】

（一）龐公 ―― 龐公は〈岸〉

（二）と〈り〉の ―― としの〈岸〉

87 陳平多轍〈一六七〉

前漢 陳平多轍

漢の丞相陳平は陽武の戸牖人也。昔、家貧くして、文道に賢かりき。黄老の術にあきらかなるゆへに、漢高祖、陳平がはかりごとをもて、項羽をうちしたがへ給へりけり。于レ時、富人張負が一人の女孫あり。五度嫁て、其夫しにゝけり。陳平、いかでかえてしがなと思へり。張負あやしと思て、陳平が家に行てみれば、莚を門にして、すべて貧きありさまなれども、道にかしこかりけるゆへに、門の外に長者の車のあとおほかりければ、心にくゝおぼえて、張負、孫女を陳平にあはせてけり。張負が子、仲、これをうけぬ事に思けり。張負云、有下美ナルコト如クシテ二陳平一而久貧賤上者（一）。平、後に世につかへて丞相とす。陳平、わかゝりし時に船に乗て河をわたるに、船人、陳平がふところに金あるらむと思て、害してとらむと思へり。陳平其心をさとりみて（二）、衣を脱て船人にかしければ、船人、金なしと知てころさず。すべてはかり事のかしこき事、かくなんありける。陳平、父母にをくれて後、妻又うせにけり。人訪ひければ、昔、魯人王寿、夢の内に舞て云く、我に三の楽あり。一には父母なし。二には妻子なし。三には財貨なし。此故にたのしみ舞也といへり。我思ふところ、王寿が夢の如とぞ答ける。

あだならぬくるまの跡にしかじとやむしろの門にこゝろよせける（片83・（平74））

【校異】
（一）貧賎上者 ―― 貧賎上〈岸〉
（二）さとりみて ―― さとりえて〈岸〉

88 孟光荊釵〈二三〇〉

後漢孟光荊釵

孟光、容貌はなはだ醜くかりけれども、徳行ことにすぐれたりき。郷里におほく是を娉（ヨバ）へども（一）、輙くゆるすことなし。卅になるとし、父母いかなるいろをか思と問ければ、家貧くとも、心ざま梁鴻がごとくなるものをと云けり。さて梁鴻にあはせてけり。つねにをどろのかんざし、布の裙を着て、をのが身を賎くして梁鴻が事をのみをもく思へり。食物をすゝむるに、つくゑをあぐる事、眉とひとしく礼をなせり。梁鴻、世をすきまし（さ）く（二）思ひとりて、五噫の歌をつくりて、孟光とゝもに琴書を身にしたがへて霸陵山に籠りゐにけり。

あき風もあはれとやおもふふくかたへとにもかくにも（三）なびくおどろを

【校異】
（一）娉（ヨバ）へとも ―― 聘（ヨバ）へとも〈岸〉
（二）すきましく ―― すさましく〈岸〉
（三）とにもかくにも ―― と〈もに（にも）〉かくにも〈岸〉

89 韓壽竊香〈四二三〉

晋書韓寿窃香

韓寿、容姿花麗なりき。女ことにいかでとのみ思へり。于レ時、大尉賈充、貌よき女ありけり。韓寿に心をうつしてけり。つゐに忍てかよひけり。時に賈充が家に人々来りあつまれるに、韓寿ことにかうばしかりけり。各これをあやめとがむるに、外国より武帝にたてまつれるたき物を、賈充并に陳騫このふたりにわかちて賜はせたりけるを、賈充むすめにあたえてけり。しかるを、韓寿夜のまのうつりがしみにける成けり。あらがふかたなくて、日比の忍事も是よりぞあらはれにける。其後、むすめを韓寿が妻になしてけり。

なきなぞといふべき物をわが袖にかくれぬものはよはのう〈へ（つ）〉りが（一）（片84・（平76））

【校異】
（一）う〈へ（つ）〉りか ―― うつりか〈岸〉

90 齊后破環〈一三五〉

戦国策斉后破環

斉の襄王の后は大史檄が女也。昔ゝ楽毅が斉の国をおかす時に、襄王かくれのがれ給程に、たれともしらぬさまに大史檄が家にやどりゐ給へり。其家の女やどり人をたゞ人にはあらぬさまにみなして、潜にきものくいものを送て〈情（情）〉（一）をほどこしけり。かくしつゝ互に心かよひにければ、遂にあひ給にけり。後に襄王位にかへりつきて、此女を迎て后に立られに（けり）。于時秦始皇、斉の国をはからむと思に、后の賢き由を聞て、まづかの心をまひなはむために連環を送給へるを（二）、后其志をさとりえて、是をうちくだきて秦の使に謝しけり。使かへりてありのまゝに

秦皇に申に、皇心(志歟)を〈美(美)〉て(三)斉国をはかる事を思ひとゞまり給にけり。

わぎもこが衣のそでをふきかへす風にあられの玉ぞくだくる

【校異】

(一)〈情(情)〉 —— 情〈岸〉

(二)送給へるを —— 送給へ〈り(る)〉を〈岸〉

(三)〈美(美)〉て —— 美て〈岸〉

91宋女愈謹〈五八九〉

古列女伝 宋女愈謹(一)

宋女は〈跑(鮑)〉蘇が妻(二)也。夫の心に露ばかりもたがはず姑を養ふ事、甚ねんごろなり。鮑蘇、衛の国につかへて三年をへけるほど、姑をやしなふ事をこたらず。鮑蘇、あたらしき妻をむかへをきてけり。宋女、今の妻の許へさま〳〵の物を送り、なさけをかけゝり。しうとめを養ふ事弥ふかくつゝしみけり。此事世に聞えて、人の妻のよきには、先宋女がためしをぞ引ける。公きゝ哀び給ひけり。鮑蘇、志を思知て、終にふた心なく成にけり。

ありはてぬ中ゝぞ(とカ)(三)と今はなりなましうきをもしたふ心ならずは(**片86**)

としをへてかはらぬみちもあはれなりうきをうらみぬ心のみかは(**平77**)

【校異】

(一)愈謹 —— 逾謹〈岸〉

(二)〈跑(鮑)〉蘇か妻 —— 鮑蘇か妻〈岸〉

(三)中ゝぞ(とカ) —— 中とそ〈岸〉

蒙求倭歌第六

祝部十首

王戎簡要(ジヨウ) 裴楷清通 落下暦数(歴異本本)

于(ウ)公高門 曹参趣装 陸凱貴盛

春申珠履 王濬懸刀 相如題柱

張氏銅鉤 黄霸政殊(一)

【校異】

(一)政殊 —— 政珠〈岸〉

92王戎簡要・裴楷清通〈一・二〉

晋書 王戎簡要 同 裴楷清通【割注】

晋の文王の時、吏部郎闕(鉄本)ありて、此つかさにおかるべき人を鐘会にとはるゝに、王戎は簡要也、裴楷は清○(通)也、此ふたりを、と申せり。裴楷をもちゐられぬ。武帝、位につきて、探(【傍記】)治(テ)(二)数策(一)、得(ヲ)一(レ)(一)、おほやけ世をおさめ給年の多少、々の(二)かずによるがゆへに、一をえたる事を公うれへ給へり。群臣の中にも是を云ひらくものなくして、各いろを失へり。尓(レ)時侍中裴楷すゝみて申云、臣きけり、天得(ヲ)一(レ)以清之、地得(レ)一(ヲ)以寧(ヤスシ)、王侯得(レ)一(ヲ)以貞(ナリ)と申せり。此後、おほやけねんごろに悦給て、裴楷が才智のあきらかなる事をいよ〳〵ほめ給へり。簡要は簡は略也、要は約也。要抄(マヽ)は約好の形也。清通は、清は朗潔澄清也、通は達他也。博覧(ミルモノヲ)(二)古今(ヲ)(一)、為(二)通人(ト)(一)、得(レ)

一タル事ハ(三)老子経にあり。王弼注曰、一ハ数ノ始メ、物ノ極リ也。各是レ一物ノ之所以為レ主也。各以二其一一ヲ、致二此清寧ヲ貞也(四)。王戎、裴楷は時の明人也。各智をあらはし、さとりをきはめたりき。王戎、おさなくて成人の智ありき。おさなき人あまたつれて遊に、道の辺にすもゝの木あり。子をむすぶことさかりなりければ、我さきにと争ひ行て、手ごとにとらむとするに、王戎ひとり、苦き李なるべしと云て退けり。人、其故を問に、答て云、このすもゝ、路の辺にあり。甘き李ならば、道行人残すべからず。さかりまで人の目たてぬに、にがきことをしりぬと云り。すもゝ、王戎が詞のごとくにゝがゝりけり。

春のいろはたゞひとしほのいはね松さてもときはのたのもしきかな（(平78)）

【割注】

私云、王戎字は濬沖瑯琊人也。裴楷字は叔則。

【傍記】

探レ策以ト二世数ノ多少ヲ一。本

【校異】

（一）得ヲ一レ ―― 得レ一ヲ〈岸〉

（二）々の ―― この〈岸〉

（三）得レ一タル ―― 得レ一事ハ〈岸〉

（四）致二此清寧ヲ一貞也 ―― 致此清寧貞ヲ一也〈岸〉

93 落下歴数〈三五八〉

前漢落下歴数(一)

落下閎、算術にかしこかりし人也。ゆくする千年の暦つくりて、公にたてまつれりけり。後に、一行阿闍梨そしるところありければ、いづれにつくべきぞとゝはれて、かれこれ用捨を定るに、暦のうちに、ゆくする上人いできたりて、我こよみをそしることあるべしと、かねて書をけるなり(二)。各目をおどろかして、つゐにあらためられずといへり。

あまの川かきながしける月なみもちよをかねたるみづぐきのあと（(片88)・(平79)）

【校異】

（一）歴数 ―― 暦数〈岸〉

（二）書をけるなり ―― 書をけるなりけり〈岸〉

94 于公高門〈八五〉

前漢于公高門 【割注】

【頭注】于公が家の門の破たるを子曼倩ともろともにつくろひけり。于公が云、此門をたかくおほきにして、駟馬高蓋いる程に立べし。我、政をおさむるごとに、陰徳おほきがゆへに、我子孫かならず家を興すべしと云へり。さておほきに高く立てけり。其後、父于公は大臣になり、子曼倩は御史大夫になりにけり。

わがかどのいさらをがはのこほりとけあくるほどなく春はきにけり

【割注】

私云、漢ノ于定国字は曼倩也。

【頭注】
其、閭門壊レ父老方ニ共ニ治ムレ之。

【校異】
ナシ

95 曹参趣装〈八六〉
前漢 曹参趣装
曹参は、沛人也。蕭何うせての(一)、すなはちみづから云、趣治二行装一ヲ、われまさに漢の敷○相たらむ(二)と云けり。かくて程なくめされて相となれりけり。
史記云、趣治レ行ヲ、治行ゞ、修二治行装一ヲ。
いひちらすあらましごとのはなの色をたもとにみつる春のあけぼの

【校異】
(一) うせての――う〈け〉ての〈岸〉
(二) まさに漢の敷○相たらむ――まさに相たらむ〈岸〉

96 陸凱貴盛〈三一六〉
呉志 陸凱貴盛
陸凱、字は敬風、呉郡の人、丞相遜が族子也(一)。忠鯁にして大節あり。一門とみさかへて、朝につかへて、皇恩にあづかる人、二相五侯、将軍十余人ありけり。家の繁昌、これをうらやまずと云人なし。孫皓と云人、是を美て、大にさかりなりと云ければ、陸凱が云、君賢にして、臣忠あれば、国之盛なり。父慈あて、子孝あれば、家之盛なり。今、政荒人弊、覆亡、是を懼、臣何ゾ敢テ言レ盛○也本(一)。
うとからぬ袖をつらねてくらゐやまいくへの峯を立のぼるらん〈平80〉

【校異】
(一) 丞相遜か族子也――丞相遜族か子也〈岸〉
(二) 臣何ゾ敢テ言レ盛○也――臣何敢言盛〈岸〉

97 春申珠履〈三四八〉
史記 春申珠履
楚の春申君は、孝烈王の相也。趙の平原君が使、春申君之家にや〈こ〉れり(一)。璹瑁のかんざし、刀剣珠玉のかざりありて、我がと思〈て〉る(二)気色にて、趙の国にはかゝるとなむ楚国の人にみえんとせり。于レ時春申君が家に三千余人の賓客来り集まれり。其上客みな、玉のくつをはけり。堂上のひかり、門前(三)のよそほひ、目をおどろかせり。平原君が使、是をみて大にはぢて、頭を低たり。
たび人のあとふむべくもなかりけり玉をあつめしくつのかよひぢ〈平81〉

【校異】
(一) や〈こ〉れり――やとれり〈岸〉
(二) 思〈て〉る――思へる〈岸〉
(三) 門前――門前〈岸〉

98王濬懸刀〈二一三〉

晋書 王濬懸刀

王濬、字は彭祖(一)と云へり。夢にみつの刀を梁の上にかけたり。やがて又、一の刀を益と見て、心に悪き夢とおそれおどろきけり。于時主簿李毅(二)あはせて云、三刀を州の字とす、一刀を益州とす(三)。汝、益州の刺史となりにけり。後に益州の刺史にぞならむずらん、とあはせてけり。

はかなくぞかたなのはとてあやぶみしさめてうれしき夢のかよひぢ（平82）

【校異】

（一）彭 ―― 彭祖〈岸〉

（二）李毅 ―― 李牧〈岸〉

（三）一刀を益州とす ―― 一刀を益をは益州とす〈岸〉

99相如題柱〈四〇一〉

前漢 相如題柱

司馬相如は、成都の人也。蜀城の北に舛遷橋といへる橋あり。相如、むかし是をすぎけるに、あやしく貧き質をうしとおもひて、われ大夫として赤車駟馬にのらずは、また此橋をわたらじと誓て、柱にかきつけてけり。後に漢の景帝○相如が才智を美て武騎常侍とす。かさねて中郎将に遷て、使として蜀郡にいるに、郡の守、むかへに来り。郡の令、弓箭をおひて前駆す、郡の人、これをみて目をおどろかしけり。

このたびは春のひかりにあふみぢやせたのなが橋ふみもたがへず（（片94）・（平83））

【頭注】

千六百番歌合　いさやさは君にあはずはわたらじと身を宇治橋にかきつけてみむ顕昭

【校異】

ナシ

100張氏銅鉤〈一〇二〉

三輔決録 張氏銅鉤

張氏、あしたにおきてみれば、一の鳩、承塵より飛来て、几の前にあり。此鳩、わざはひをなすべくは、承塵に帰りゐるべし、よろこびをなすべくは、我ふところにいれ、と云て、懐をあけてまつに、鳩すなはち飛入ぬ。懐をさぐるに、一の銅鉤をえたり。是を帯にして朝につかふるに、数郡の守にいたり、九卿に列にけり。于レ時蜀客来て、張氏が許につかふ女をまなふて(一)、潜に銅鉤を買とりて帰にけり。蜀客俄にものあしくなりて、衰にけり。怪みおそれて、銅鉤を張氏にかへしてけり。張氏七世の孫までにとみさかへけり。

うれしさをなゝのよまでぞかさねけるはとふく秋の行すゑの袖（（片95）・（平84））

【校異】

（一）まなふて ―― まいなふて〈岸〉

101 黄霸政殊〈三一〉

〈黄〉霸政殊(一)

後漢の黄霸は、潁川の大守也。仁風おほきにおこなはれて、天下おさまり、人民たのしび、国に嘉禾おひ、堺に鳳凰あつまれりけり。

めづらしきこずゑのとりぞしらせけるのどけきみよの春のさかひを

【校異】

(一) 政殊 —— 政珠〈岸〉

蒙求倭歌第七

羈旅部十首

袁宏泊渚　博望〈尋望〉河(一)　郭文遊山

子猷尋戴　管仲随馬　李陵初詩

広徳従橋　呂望非熊　郝廉留銭

長房縮地

【校異】

(一) 博望〈尋望〉河 —— 博望尋河〈岸〉

102 袁宏泊渚〈一一二〉

晋書 袁宏泊渚

晋の袁宏、字は彦伯と云、わかくより文道を〈ふ好〉て(一)、名をえたりき。事にふれて情ふかゝりし人也。袁宏、海のなぎさ船のとまりの物哀なるに、〇(左:とり歟)ごころ(二)心をすましけり。時は秋の初なり。更闌(タ)け、夜閑にして、風すゞしく月明なるに、遠漢の漂々たる(三)にあたりて、長江の眇々たるをのぞめば、松のひゞき、浪のをと、一として心をくだかずと云事なし。きしかた(四)ゆくすゑの事を思ひつゞけて、時涙をおさへ(五)、自つくれる詠詩史の(六)詩を誦しけり。時に謝鎮西(尚本)と云琵琶ひき、同じ渚にとまりあへり。ほのかに詩を誦するこゑを聞に、なにとなく旅の心あくがれて、商人船にこぎまたり(七)、近くよりて誰ぞととはするに、袁宏となん聞えければ、船をすゝめて語ひよりて、共に旅の天の景気の物がなしきに、或は狂事(往)の(八)夢にゝたる事をうれへ、或は旧友の半される事を哀びつゝ、互にたもとをしぼりけり。かくて月西に傾て、雲東にあけなんとすれば、なく〳〵名ごりをおしみて別さりぬ

いかにせむおなじうきねにあり明明の(九)月のともぶねこぎわかれなば（(片97)）

【校異】

(一) 〈ふ好〉て—好て〈岸〉

(二) 〇(左:とり歟)ひ)こころ —— ひとり〈岸〉

(三) 漂々たる —— 凛々たる〈岸〉

(四) きしかた(こイ) —— きしかた〈岸〉

(五) 時涙をおさへ —— 涙をゝさへて〈岸〉

(六) 詠詩史の —— 〈詩詠〉史の〈岸〉

(七) こきまたり(わイ) —— こきまたり〈岸〉

(八) 狂事の(往) —— 往事の〈岸〉

(九) あり明明の —— あり明の〈岸〉

103 博望尋河〈一八〉

前漢 博望尋河

漢の武帝、張騫を使として、河のみなかみをきはめに遣しけり。はるかに十万里の波を凌て牽牛国にいたりて、織女つめの紗（ウスモノ）あらふにあひぬ。織女、あやしみ問に、漢帝の使として、河のみなかみをきはめにまかできたるなりと云。織女の云、河の源はきはむべき事かたし。是よりおくを思はゞ、汝が命あるべからず。すみやかに故郷に帰て、漢帝にみえたてまつらん事をおもへと云。さて一の柤（ウキ）に（一）のせて、一の石をぞあたえける。張騫、是をえて、事なく帰にけり。漢帝、封じて博望侯とす。

東方朔、此石を見て、織女支機石となん云ひける。

あまの川うきゝにあへるみちなくはなをこそきかめ（ゆ）（二）くものみなもと（**（片98）・（平86）**）

【校異】

（一）柤（ウキ）に ―― 盃（ウキ）に〈岸〉

（二）きかめ（ゆ） ―― きかめ〈岸〉

104 郭文遊山〈一一一〉

晋書 郭文遊山

晋の郭文、字は文挙といふ。心を山水景気に（一）そめて、人の跡たえたる山かげの木のもとに、かりいほりを結て、独日数を送て、家ぢをわすれてけり。世のまじはりをこのまずして、すける心に身をまかせつゝ、あくがれあるきけるなり。悪き獣、かたはらにあれども、害をなさず。

おく山の花ともみぢにあくがれてみやこのうちはすむなばかりぞ（**（片99）**）

まだしらぬ山した水にすみかへて家ぢを旅の空になしつゝ

【校異】

（一）山水景気に ―― 山水の景気に〈岸〉

105 子猷尋戴〈一七六〉

子猷尋戴

晋の王羲之（義か）第四の子（一）王子猷と戴安道とは多年の友也。琴詩酒の遊には席をひとつにし、雪月花のながめには袖をまじへずと云事なし。子猷、山陰に籠居たるに、夜大に雪ふれりけり。子猷、ねむりさめて、酒を酌て四望するに、景気皎然（皓本）たり。独心をすましつゝ、左思が招隠の（二）詩を詠じて、剡県の戴安道を思へり。すなはち一の小船にさほさして剡県に赴く。沙堤に雪しろくして、水面に月浮べり。船の中のながめ、浪のうへのあはれ、一としてこゝろをくだかずと云事なし。あくがれゆくほどに、戴安道が家の門の辺にいたりぬ。五夜まさにあけなむとして、万感すでにつきにければ、むなしくかへるを、あはではいかにと問人ありければ、雪月の興に乗て来き。興尽てかへりぬ。何ソ必モ戴安道にあはむとぞ答へける。

なにかまたあはでかへるとおもふべき月と雪とはともならぬかは（**（片100）・（平87）**）

【校異】

（一）王羲之（義か）第四の子 ―― 王義か第四の子〈岸〉

（二）招隠の ―― 招陰の〈岸〉

106 管仲随馬〈四一三〉

韓非子 管仲随馬

管仲は斉の桓公につかへて上郷（ヤウヤウ）（一）たりき。桓公、孤竹と云所をゆく時に、大に雪ふりて、道にまどひにけり。于レ時管仲が云、老馬の智をもちゐるべしと云り。爰に老馬を放て、其跡を行に、馬、もとこし道をわすれねば、遂にしるべとなりにけり。

管仲、公子紬（札）（二）が将として、戦に赴て、桓公をおいせむるに、あやうくみえけるを、おびのうゑを射（射鉤中史記）て、いつはりたすけてけり。桓公後に管仲をむかへて、政をまかせてけり。まよはましゆきに家ぢをゆく駒のしるべをしれる人なかりせば（片101）

【校異】

（一）上郷 —— 上卿〈岸〉

（二）公子紬（札） —— 公子記〈岸〉

107 李陵初詩〈一九〉

前漢 李陵初詩 私云、李陵は少郷（ヤウヤウ）也（一）

李陵、漢王の御使として、胡国を譴（セメ）に赴くに、五千の兵をして十万のゑびすに戦に、節をきはめむとして、返てゑびすにとり籠られて年をつめり。ゑびすの王、禄をほどこしてつかはんとすれども、まさに不随して、漢の節を思へり。ゑびすいかりてゆるさず。はるかに故郷を隔て、唯異類をのみぞ見ける。于レ時蘇武すでに都へ帰る由をきゝて、蘇武に詩を送れり。

【頭注】携（ヘテ）手ヲ上ルニ河梁ニ　遊子暮ニ何カ之リ（脱六句（二））

詩手 又云、双鳧（三）俱ニ北ニ飛ビ　丁鳧（四）独リ南ニ朔ケル（五）　余自レ留ニ新館ニ　子今帰ニ故郷ニ（脱五句（六））【割注】

五言ノ詩、これにはじまれり。

おなじえにむれゐるかものあはれにもかへるなみぢをとびをくれける（片102・平89）

【頭注】

摧レ手上ルニ河梁ニ　遊子暮ニ何ニカ之　徘二徊シ蹊路ノ間ニ一　恨二トシテ不レ得レ辞コトヲ　晨風鳴ヲ北林ニ一　燿燿東南ヲ飛ブ　浮雲日ニ千里　安ンソ知ンレ我ガ心ノ悲ミ　武別レ陵詩曰、

双ノ鳧俱ニ北飛ビ　一鳧独南翔ル　子当レ留ルニ斯ノ館ニ一　我当レ○帰故郷ニ一　別如ニ秦胡ノ一　会見何ソ渠央ナル　愴恨切ニ中懐ニ一　不レ覚シテ涙沾レ裳　願クハ子長努力セヨ　言笑莫シ相忘ルヘコトヲ

【割注】

子当レ留斯館一我今帰二故郷一。異本 是ハ武之詩也。

【校異】

（一）李陵は少郷也 —— 李陵字は少卿〈岸〉

（二）脱六句 —— ナシ〈岸〉

（三）双鳧 —— 二鳧〈岸〉

（四）丁鳧 —— 一鳧〈岸〉

（五）独リ南ニ朔ケル —— 独南翔〈岸〉

（六）脱五句 —— ナシ〈岸〉

108 **広徳従橋〈三九七〉**

前漢 広徳従橋

後漢の御史大夫薛広徳(一)、字は長郷(ママ)(二)と云、おほやけ廟をまつらむとていで給に、其道、風波けはしきわたりを船にのり給に、広徳、橋よりわたり給へと頻に申おこなふを、王、もちゐ給はず。重て諫申に、猶きゝ給はず。時に光禄大夫張猛と云人申て云、君聖なれば、臣直し。船に乗ては危し、橋にしたひては(三)安し。広徳が申に随ひ給べし、と云へり。理を思知給て、橋よりわたり給にけり。

波あらきはまなの海をあやぶみしこゝろのはしのあさからぬかな（片103・（平90））

【校異】

（一）薛広徳 ―― 薩広徳〈岸〉

（二）長郷 ―― 長卿〈岸〉

（三）したひては ―― したかひては〈岸〉

109 **呂望非熊〈四〉**

六韜 呂望非熊

周の文王、渭浜の畋(カリ)にいでむとて、史篇(編本)に卜(ボク)せらるるに、獲(エモノ)は熊にもあらず、羆(ヒ)にもあらず、龍にもあらず、虎にもあらず、天の君に師をおくらむずるなりとうらなへり。文王、三日(一)精進潔斎して、渭浜にいでゝ、一人の翁の釣するにあひ給ぬ。呂望と聞えし人なりけり。文王、これをみて、悦て車の右にのせて帰給て、政をまかせ給ければ、世すなほに民やすくなりにけり。

非本文 呂望、昔妻あり。呂望が貧きにたへずして近去にけり(二)。後に呂望、斉の国の君として赴く道に、なきかなしぶ女ありけり。恠(ケイ)問に(三)、我は呂望が妻たりき。今斉の君となれるをきくに、心みじかかりし事を悲ぶなりと云。呂望、我事と答ふ。女かへりすまん事をのぞむ。呂望、水を女にくませて、土(薬乎)にいれて又本のやうにうけよと云。水かへる事なし。于(レ)時云、汝、恩愛つきし事、此水のごとしと云てすぎぬ。

かりくらししらぬおきなにあひみるもこゝろのうらの(四)かゞみなりけり（（片104）・（平91））

【校異】

（一）三日 ―― 七日(ミイ)〈岸〉

（二）近去にけり ―― 逃去にけり〈岸〉

（三）恠(ケイ)え問に ―― 恠(ちゐイ)み問に〈岸〉

（四）うらの ―― うらの〈岸〉

110 **郝廉留銭〈二四三〉**

風俗通 郝廉留銭

郝子廉はるかなる道をゆくに、河をわたるとて馬に水をかひてけり。銭を水の底になげてすぎぬ。さて姉が家にいたりぬ。姉、飲をまとらく(ママ)、遂に暗に金を席下にとゞめてさりぬ。以下の歌落丁。

【校異】

ナシ

111 **長房縮地〈四五〇〉**

後漢 長房縮地

神仙伝云、費長房、汝南人、既二随二壷公一、壷の中にいる。公云、長房に仙道をもて教べからず○〈書〉て（一）、竹一竿をこれにあたふ。長房、この竹に乗て、地を縮むる事をみて、家にかへる。後にこの竹を投二於葛陂一。化して龍となりてさる。かねて一の符を遺す。これによて投地上ノ光神（左一傍記）（二）、つゐに能駆二使百鬼一及二地詠一を縮るなり。

歌脱（三）

【傍記】

主二地上鬼神一

【校異】

（一）教へからす○〈書〉て ―― 教へからすと云て〈岸〉

（二）投地上ノ光神（左一傍記） ―― 投地上光神ヲ〈岸〉

（三）歌脱 ―― ナシ〈岸〉

蒙求和歌第八

閑居部十首

范蠡泛湖　於陵辞聘　許由一瓢

厳陵去釣　孫敬閉戸　仲連蹈海脱

顔回簞瓢（一）　楊雄草玄　蒋詡三径

張湛白馬

【校異】

（一）簞瓢 ―― 瓢簞〈岸〉

112 范蠡泛湖〈二七四〉

史記 范蠡泛湖

范蠡、越王勾践に仕て、世の政を行けり。呉王扶差と軍をあらかふ（一）ほど数十年、心を一にして会稽の恥を雪てけり。国をさづくれどもうけとらずして、今は世もおさまりぬとて、閑によをわたらむとするを、勾践、ねんごろにおしめども、誣て（二）去ぬ。人を遣て留れども、我きみのために忠ふかゝりき。いとまをたまはらんをもて報とせん、とて（三）、遂にかへらず。湖上に船を浮て、船の中にして閑に世をわたりて、心のまゝにあそびけり。勾践むかしの忠のむなしかるべき事をうれへて、会稽山を賜ひけり。後に陶にをこなかれて（四）朱公といへり。陶は天下の最中なるがゆへに、あきなひに便ありけり。その利、十九年のうちに三たび千金をそへけり。ふたゝびは分て貧き友、したしきゆかりには（五）あたえける。老子は漢武帝の時は東方朔といひ、文帝の時は、河上公といひ、斉の時は陶朱公といひ、越の時は范蠡といへり。漢高祖の時は蕭何といひ、周の時は大公望といひ、尭の時は四嶽といひ、黄帝の時は風詔といひ、伏羲の時は勾亡といへり。惣て一万八千歳をかさねたり。

雲さはぐみやこのそらをへだてきてのどかにすめるさゞなみの月（片107）

【校異】

（一）あらかふ ―― あらかふ〈岸〉

（二）誣て ―― 強て〈岸〉

（三）とて ―― と云て〈岸〉

（四）をこなかれて ―― をこなかれて〈岸〉
（五）ゆかりには ―― ゆかりにそ〈岸〉

113 於陵辞聘〈三一八〉

於陵辞聘

古列女伝 楚王、於陵子が大に賢なる事を知て、相とせむとして使を遣て金百鎰を送れり。さて召ども金をかへしてまいらずといへり。陳仲子が高士伝云、於陵子、もとの名は仲子、斉の国の人なり。妻と共に楚にゆきて於陵といふところにこもりゐて、みづから於陵子といふ。貧けれ共卑くも非義のむさぼりをもとめず。楚わうの（一）賢なる事を聞て、相としてつかはんとおぼして、金百鎰を送りて頻に召に遣ければ、妻にいひあはせけり。今日相となりてあす駟をむすび、騎をつらねて汝が心をたのしめむといひけり。妻の云く、駟をむすび、騎をつらねてたのしまんところ、膝を方丈にいるゝにすぎじ。あまくするところ一肉（二）にすぎじ。あやしきいほのうちにしづみては中〳〵〇〈し〉のしき【頭注】（三）身なり。進て楚国に仕てうれへをいだかん事をそら人は（四）汝、命をたもつべしと答けり。於陵のがるゝかたなき理をいよ〳〵思ひ知て、使者に謝して金をうけとらずして、終にまいらず。妻と共に猶山ふかくかくれさりぬといへり。

ともすれば人にとかなじ（五）みちかへてなを山ふかくすみぞなしつる（（片108））

【頭注】
非二与レ物無二治レ

【校異】
（一）楚わうの ―― 楚王その〈岸〉
（二）一肉 ―― 一目〈岸〉
（三）〈し〉のしき ―― たのしき〈岸〉
（四）をそら人は ―― をそらくは〈岸〉
（五）とかなし ―― とはれし〈岸〉

114 許由一瓢〈一四六〉

逸士伝 許由一瓢

許由は潁川の人なり。世をうきものに思ひ取て、箕山にこもりて年を送りけり。堯、許由が賢を知て、世を譲らむと聞えけり。許由、うき事きゝつといひて、左の耳を潁川のながれにあらひけり。時に巣父、牛を引て潁川の流をわたりて、水をかはんとするが、許由が耳をあらふを見て、水けがれぬといひて、牛を曳てかへりにけり。許由、箕山の松の下の泉の水を手に汲て飲けり。人、これをあはれみて（一）、なりひさごを送りけり。許由、水をくみをはりて、梢にかけてけり。瓢、かぜの吹たびに歴々としてなりけり。許由、なるこゑをわづらはして（二）思て、打破て捨にけり。

しみづくむあとたゆとしも（三）松かげや風にみだるゝをとはよしなし（（片109））

【校異】
（一）あはれみて ―― あ□れみて〈岸〉
（二）わつらはして ―― わつらはしく〈岸〉

（三）たゆとしも ―― たゆとても〈岸〉

115 厳陵去釣〈五四八〉

後漢 厳陵去釣　与本注大ニタガフ

後漢の厳光、字は子陵なり。このゆへに厳陵といふ。昔光武につとめふかゝりき。光武位につきて後、厳陵をわすれ給にけり。厳陵世をうらみて孤亭山に籠居て、釣をたれてすぎけり。光武、三たびめせどもまいらず。于レ時天変あり。司奏て云く、旧臣ありて君をうらみたてまつる事あるべし、と申けり。帝、厳陵なりとて、猶度々めせども遂にまいらず。厳陵がつりせし所を厳陵瀬といへり。

さりともとたのみしせゞをこぎすてゝうらみにしづむあまのつり船（（片110）・（平95））

【校異】

ナシ

116 孫敬閉戸〈一〇〉

楚国先賢伝 孫敬閉戸

楚人孫敬、あざなは文宝、常に戸を閉て書を読けり。ねぶたかりけるおりには、縄【縄注】してくびに結て、梁の上に懸て、目をさましけり。市に出ければ、人これを見て閉戸先生とぞいひける。後に道に長ぜり。帝召どもまいらず。

としをへてさしこもりけるまきの戸のうちにてまどのくらからぬかな（（片111））

まきの戸にさしこもるとはみしかども心にくらき道ぞなかりし（一）（平96）

【頭注】

睡則以レ縄繫レ頸ニ懸ニ之ヲ梁上ニ

【校異】

（一）なかりして（く） ―― なかりしィ〈岸〉

仲連蹈海〈二七三〉

目録のみ・本文なし

117 顔回簞瓢〈四三五〉

論語 顔回瓢簞　此所脱仲連蹈海章

顔回、家貧かりけれども、文道に心をよろこばしめけり。一簞の食（シ）、一瓢の飲のみあり。よそにみるだにも、たゆべくもなく、あやしきいほりのすまひを自は愁とせず。孔子その賢なる事をぞ常にほめ給ける。

簞は竹の籠、飯いるゝ器なり。瓢はなりひさご、水入る器なり

さびしさをたれなげくらむうきよをばしづみてし物ぞすむべかりける（（片113）・（平97））

【校異】

ナシ

118 揚雄草玄〈一一六〉

前漢 楊雄草玄

楊雄、漢の代の人、子雲といふ。文と酒とをたしなみてしづかに世をわたりし人なり。庭のかよひぢ跡たえて、門の辺に人の来事稀なれども、書巻をひらく時、故人にむかふがごとし。罇酒（一）をくむときに身の愁なきがごとし。後に太玄経をつくりてけり。人来て是を見ておほやけに申てけり。おほやけことにもちあそび給ひけり。

みづぐきのあとにむかしをみるも猶やどの人めとならずやはあらぬ（**片114**）

【校異】

（一）罇酒 ―― 〈蹲罇〉酒〈岸〉

119 蒋詡三逕〈一四五〉

前漢 蒋詡（ク）三径

蒋詡、性、廉にして家の貧き事をうれへず。世をわたる心なくして、閑に日を送りけり。羊仲・求仲と云二人の友のみぞ、おなじ心に世の交をこのまずしてともなひあそびける。庭の辺に竹を殖て、竹の下に僅に三の径ぞありける。

三径といへるは、門のみち、井のみち、廁のみちなり。又三径は、車・井・廁のみちともいへり。

よもぎふの露わけはぶるかよひぢはあとたえたりといはぬばかりぞ（**片115・平98**）

【校異】

ナシ

120 張湛白馬〈二〇六〉

張湛白馬

張湛、後漢の扶風の人也。常に白き馬に乗ければ、世の人白馬先生とぞなづけゝる。おほやけ、心のかしこき事をきゝ給て、司徒になされしかども、すなほならぬ世のまつりごとをかたぶきてしたがはず。朝堂にいたりてしたてゆばりをしけり。病のをもきよしをのぶ。終にこもりゐにけり。

とりつなぐ人にはあらでふるさとの野ばらの草にこまはかくれぬ（**片116**）

【校異】

ナシ

蒙求和歌第九

懐旧部十首

王導公忠　東平為善　魏儲南館
華歆忤旨　陳群蹙容（シク）　宋弘不諧（一）
劉阮天台　何武去思　季札掛（クワ）剣
王脩輟（テツ）社　子路負米

【校異】

（一）宋弘不諧 ―― 宋弘不階〈岸〉

121 王導公忠〈八〉

晋王導公忠　【割注】

王導、晋の中宗にちかくなれつかふまつりて、年月を送りむかふるに随て、御志もふかくなりまさりけり。常に一床に召けれども堅く恐れ申て、弥身をつゝしみ○(けり)(一)。中宗かくれ給て後、昔をしのぶあまりに、なく〳〵みさゝぎを拝する事、日をかさねてをこたる事なし。古官(百)【頭注】(二)のみさゝぎを拝する事、是よりはじまれり。

をくれゐてしたふ涙はためしあれどこけのしたまでとふはまれなり（片117）

【割注】

私云王導字は茂(ボ)弘

【頭注】

百官拝陵初

【校異】

（一）つゝしみ○(けり)――つゝしみけり〈岸〉

（二）古官(百)【頭注】――百官〈岸〉

122 東平為善〈一五九〉

後漢東平為善

東平の憲王、蒼は肅宗(顕本)の○(同母本)弟也。天、其仁にくみし、人、其徳をあをぎゝ。肅(顕本)(左)宗、憲王蒼にあひて、人の家にあるに、何事をしてか楽とすると聞えければ、為(スルヲト)レ善ヲ尤たのしみとすと答けり。此事を聞て嗟嘆せずと云事なし。憲王蒼、東平に行て、長安の古郷を恋てはかなくなりにけり。其墓の上の松柏、西になむなびきける。後に古郷にゆきて肅宗の云、其人を思て、其里にいたるに、其所は存て、其人は亡せり、とぞかなしび給ひける。

むつごとのなごりに夜はゝふけしかどなしとてかへるたびはなかりき（片118・平101）

【校異】

ナシ

123 魏儲南館〈四八九〉

魏儲南館

魏の文帝、儲君たりし時、朝歌(元域本)の令、呉質がもとへつかはす書に云、毎レ憶(念本)(ソノカミ)二昔日南皮之遊一、馳一騁テ北場一二、旅二食南館一二矣。

たび人となりてぞみつるやへざくらはるやむかしのならのふるさと（（片119））

【校異】

ナシ

124 華歆忤旨・陳群蹙容〈二一一・二一二〉

華憐譜序華歆忤旨(ヤウ)(左：サカウ)世説陳群蹙容(シク)(左：ウレヘ)

魏ゆづりをうくる時、朝臣三公以下みな爵をうく。時に司徒華歆(字子魚)、顔色忤(サカウ)、尚書の令陳群(字長文)、蹙容あり。ともに爵にすゝまず。帝、御気色(左：○)とりて(一)、群臣を召て、朕、応レ天ニ受ヲ禅一ヲ、人々よろこびよろこべり。華歆と陳群と、共によろこば

ざる事のゆへをとはれけり。陳群跪て申て云、臣、相国とひさしく事二漢朝一三、今雖三欣ブトヲ二聖化一ヲ、猶ヲ義顕タリ二於色一ニ、をそらくは君の御心にたがふらん事のがれがたき由を答申に、帝、ふたりがふかき(二)なさけを褒哀ビ給て、弥をもくしたまへり。

めづらしきそらをみるにもかなしきはむかしにかはる春のあけぼの（片120・平102）

【校異】

（一）御気色（左：○）とりて ―― 御気色かはりて〈岸〉

（二）ふかき ―― ふるき〈岸〉

125 宋弘不諧〈二三二〉

宋弘不諧(一)

後漢の宋弘、明帝の時に、侍中として仕へけり。容姿華麗にして、なさけふかゝりき。于レ時、帝のおば湖陽公主、宋弘(二)がもとより妻あることを知て、色にはいでねども、いかでもと思ふ心ふかゝりけり。何なる隙かありけん、屏風の中にちかづきよりて、語て云、富は易レ交ヲ、貴しては易レ妻ヲ、きこえけり。宋弘(三)答云、臣聞ク、糟糠之妻をば不レ下レ堂ヨリ、貧賤之友をば不レ可レ忘。かく答て去ぬ。公主、宋弘を思ふ心ます〳〵深くなりて、とがむばかりになりにければ、帝聞給て、すゝめ給へども、昔の情をあらためまうく思ひとりて、遂にうけ申さず。

ふりにけるちぎりをいかゞわすれ草あだなる露にむすぼゝるべき（片121）

むかし思ふ心のみこそますかゞみまたはうつろふかたもなき身に(三)（平103）

【校異】

（一）宋弘不諧 ―― 宋弘不階〈岸〉

（二）宋弘 ―― 宗弘〈岸〉

（三）かたもなき身に ―― かたしなき身そ〈岸〉

126 劉阮天台〈三四四〉

続斉諧記 劉阮天台

漢明帝の時、剡(セン)以冉反県に劉晨(一)・阮肇と云、ふたりの人あり。永平十五年に共に薬をとらむために、天台山に入にけり。道をふみたがへて、粮つきにけり。山の辺を望ば、一本の桃の木ありけり。共に桃を取てくひて、力いできぬ。谷【頭注】に下て、手洗ひ口すゝぐ所に、あをな、にらの花、山川に流いづ。又一のさかづきに、ごまのいひくだけつきたる、ながれゆくを見るに、人里とをからずと心えて、水をわたりて一里を過て、一山をこえて、大なる谷に出てみれば、二人の仙女あり。ことにふれてたぐひなきさまなり。仙女、即、劉阮が姓名をよぶこと、交ふかき(二)ものゝごとし。よろこびてしたがひゆく程に、黄金珠玉(三)をかざれる館の内に入ぬ。左右につらなれる女、翠(ミドリ)の袖をならべて、ことゞ〳〵く端正也。すべて男は一人もなし。初にはごまのいひ、羊のほしじゝ、酒、桃十五をすゝめ(四)、後には絃歌の曲を施せり。耳にふるゝ所、心をうごかし、涙を催さずと云事なし。かくて日くれぬれば、劉晨(五)・阮肇、ふたりの仙女と各ふしにけり。情ふかき心ざま、ためしなきほどにおぼえけり。十五箇日にもなりぬ。今はかへりなむといふを、仙女したふけしきねんごろにして、こゝに来れる事、宿福の招く所あ

りて、契を結ぶ事をえたり。何の〇(楽む歟)(六)所をねがふべきぞと云て、強にせきとゞむれば、さすがにすてがたく覚て、年なかば(マヽ)かりにもなりにけり。天気和暖なる事、二三月の中のごとし。百鳥かたらひ鳴て、万木さかりに花さけり。旧里をこふる涙、この時にしていよ〳〵切なり。すでにかへる朝に臨て、諸の仙女のあつまりて(七)、絃歌の曲をつくして、二人を送るなごりかたみにせんかたなくおぼえけり。東の洞の口よりかへれと教て、なく〳〵わかれさりぬ。さて旧里にかへり入ぬ。纔に半年と思しに、昔の家、跡かたもなく、相知れる人ひとりもなし。里人これをあやしめり(八)。七世の孫の云、伝聞、上世の祖翁、山に入て後、ゆきかたをしらず成にけると云伝へたる事あり。もし其人か、といへり。やどらむとするに所なく、かへらんとするに道なし。于」時大康八年也。

ふるさとはありしにもあらずきしかたにまたかへるべきみちはゝずれぬ(平也)(九)(片122)

【頭注】

望(本文)見」蔓菁葉従」山復出」

【校異】

(一) 晨 ―― 晟(長イ)〈岸〉
(二) ふかき ―― ふるき〈岸〉
(三) 黄金珠玉 ―― 黄金朱玉〈岸〉
(四) 桃十五をすゝめ ―― 桃十五〇(を)すゝめ〈岸〉
(五) 劉晨 ―― 劉晟〈岸〉
(六) 〇(楽む歟) ―― ナシ〈岸〉
(七) 仙女のあつまりて ―― 仙女あつまりて〈岸〉
(八) あやしめり ―― あやしへり〈岸〉
(九) (平也) ―― ナシ〈岸〉

127 何武去思〈四六六〉

前漢 何武去思

漢書云、何武、字は君卿(公本)、蜀郡の人也。事に触てなさけふかゝりき(一)。好て人をすゝめて、人のよき事をあらはさんと思へり。其所を去て後、常に何武がことを思はずといふ人なし。

称(左:上本)人之善」欲レ除ント吏ヲ。先ツ為テ二科例ヲ一、以防二請託一。其居(左:下)所(左:上本)亦無二赫々名一(已上イ本)(一)

春がすみたちわかれけるやま人のこゝろの花をおしむばかりぞ(片123)

【校異】

(一) ふかゝりき ―― ふか〈き〉かりき〈岸〉
(二) 称人之善ヲ欲レ除ント吏ヲ。先ツ為テ二科例ヲ一、以防二請託一。其居(左:下)所(左:上本)亦無二赫々名一(已上イ本) ―― 刋人之善欲除吏。先為科例、以訪請記。其居所亦無赫々名(已上イ本)

128 季札挂剣〈四〇七〉

史記 季札掛剣

呉の季札、おほやけの御使として隣国に行けるに、徐君、季札が剣を見て心をかけてけり。季札其心をさとりて、かへつてあたえんと思てゆきぬ。帰来て、徐君をたづぬるに、早く死にけりといふ。季札、徐君が塚に行て、剣をときて家樹(一)の枝に

かけて去ぬ。なき跡までも、思ふすぢをたがへざりけるなり。なきあとにかくるなさけのふかきをも(二)あるよをとはゞなべてならまし

【校異】
（一）家樹 ―― 柏樹〈岸〉
（二）ふかきをも ―― ふかき哉〈岸〉

129 王脩輟社〈二〇八〉
魏志 王脩輟社

魏の王脩、七歳になりける時、母、社・日(一)に死にけり。王脩、社日を迎るごとに母を恋つゝ、悲び痛みけり。隣里の人、是を哀て、社日に彼跡を訪ひけり。

里とは廿五家をいへり。社日とは春秋分、つちのえの日をいへり。燕は春の社日と(二)来て、秋の社日に帰る也。

あきかへるつばめもはるはくる物をながきわかれぞけふもかなしき（片124・平106）

【校異】
（一）社・日 ―― 社日〈岸〉
（二）社日と ―― 社日に〈岸〉

130 子路負米〈五八〉
家語 子路負米 私云子路字は仲由。孔子の弟子也。

子路といひし人、家貧くして、父母を養ふこゝろざしあさからず、身づから米を負て、百里の道をゆきかよふ。我身は藜藿などを食して、おやのくひものゝよからん事をのみ思けり。おやうせて後、楚国に行て官を給り職をかさねて、家富財豊になりぬ。かくてもおやにみえぬ事をのみ、ねても思ひ、さめてもうれへけり。衣の袖の錦繡も、おやなければ、誰にか見へむと悲ぶ。倉の内の金玉も、おやなければ、誰ためにかかたらん、とうれへ、百乗の車のかざりかひなく、千鍾の粟のたくはへもよしなくおぼへつゝ、貧くておやを養しときのみ恋しくおぼえけるまゝに、昔のあやしかりしすがたにて、あふひのみをくひてのみぞすぐしける。

論語云、六斗四升を曰レ釜。十六斛(一)を為レ庚。十六斛を曰レ康。五康(二)を合て為二八十斛一。又云、釜十則鍾也。

一石四斗也、十六石を康とす。

たらちねのみぬは心のやみなればよるのにしきにぬるゝ袖かな（片125・平107）

【校異】
（一）斛 ―― 年斗〈岸〉
（二）康 ―― 〈合康〉〈岸〉

蒙求和歌 第十
述懐部廿首

梁鴻五噫　秉去三惑　屈原沢畔
漁父江浜　陸玩無人　賈誼非次
范丹生塵　孫晨藁席　君平売卜
孔伋縕袍　田方簡傲　郤詵一枝
田予倹素　晏嬰脱粟　叔敖陰徳

柳下直道　季布一諾　荘周畏犠
伍倫十起　子罕辞宝　朱家脱急

【校異】
ナシ

131 梁鴻五噫〈四六八〉

後漢 梁鴻五噫

梁鴻、後漢の代、扶風の人也。才覚世にすぐれたれ共、おほやけもちゐ給はねば、よをうきものに思乱て、五の歎の歌をつくりて霸陵山にかきこもりにけり。孟光といふ心賢き妻を身にそへて、あけくれは書を誦し琴を引てぞ心をなぐさめける。

五噫者、一には天を恨み、二には地を恨み、三には人を恨み、四には宿報を恨み、五には我身を恨といへり。

五噫（異本云）事、登（聆本）彼北芒兮噫（一）、顧（緊本）視帝京兮噫（二）、慕（ナシ（左：○））之未央兮（已上ナシ）噫（三）、宮室崔嵬（タリ）兮噫（四）、人之劬労（ス）兮噫（五）、遼（○（六））○○○

【傍記1】（左：【傍記2】）遂於越中也。

なげきこし山のいくへのおくのいほは身のうきぐもぞとざしなりける（**片126**）・【下句】（**平108**））

【傍記1】
遂 ○未央兮噫本

【傍記2】
卒二於呉一本

【校異】
（一）登彼北芒兮噫 ―― 一登彼此卯〈号（兮）〉噫〈岸〉
（二）顧（緊本）視帝京兮噫 ―― 二顧視帝京号噫〈岸〉
（三）慕（ナシ〈左：○〉）之未央兮（已上ナシ）噫 ―― 三慕之未央号噫〈岸〉
（四）宮室崔嵬（タリ）兮噫 ―― 四宮室崔嵬号噫〈岸〉
（五）人之劬労（ス）兮噫 ―― 五人之劬労号噫〈岸〉
（六）遼 ―― ナシ〈岸〉

132 秉去三惑〈一八六〉

後漢 秉去三惑

秉去、常の詞に云、われ三の惑あり。一には酒にまどひ、二に色にまどひ、三には財にまどふ。この三のまどひを心の底にうれへけるなり。

ゆめのよをかりのなさけにほだされてさめぬはゐひのまどひなりけり（**片127**・（**平109**））

【校異】
ナシ

133 屈原沢畔・漁父江浜〈三〇九・三一〇〉

史記 屈原沢畔（同）漁父江浜

楚屈原、懐王につかへて三閭大夫たり。王、甚よの宝としき。同列の大夫靳尚が心に、屈原が才智すぐれ、賢慮のいたれるを嫉み妬ましく思なりぬ。さま〴〵のはかりごとをめぐらして王に讒しければ（一）、王、人の詞につきて過なき屈原をはなたれ

にけり。屈原、江浜に遊（逝歟）て沢畔にさまよふ。顔色おとろえたるさまなり。漁父の江浜に釣するあり。屈原が欣然としてみづからたのしめる〔二〕を見て、汝は三閭の大夫にはあらずや。こゝにこゝには〔三〕なにせらるゝぞと問に、屈原が云、世は皆濁れり。我ひとりすめり。衆人皆酔えり。我ひとりさめたり。この故に、王にはなたれたるなりといへり。漁父云、聖人は物に凝滞せず。故に世とをしうつる。世みな濁らば〔四〕、何に其塗泥【頭注】を掘て、其浪（波本）をあげざる。衆人みな酔らば、何ぞ其糟を（左、哺本）哺て其酮（左、ジル）を歠（左、啜本）（スヽラ）ざると。屈原が云、我きく、新にかしらあらふものは必冠をはじて、あらたに俗（俗）ものは必衣をふるふ。いづくんぞ、身のよくさつ（左、察）〳〵たるをもて、物の汶々たるを〈か〉（う）けんや〔五〕といへり。漁父、悠尓として〔六〕○去ぬ（わらつてイ）〔七〕。ふなばたをたゝきて歌て云、滄浪の水すめらば、我纓をすゝぐべし。滄浪の水にごらば、我足をあらふべし。かく云てさりぬ。共にものいはずなりぬ。

懐王、秦にいらんとするを、屈原諫て云、秦は虎狼のごとし。きみ行てかへる事をえじと申を、靳尚が讒によて不用して、秦に向て項羽がためにほろぼされぬ。襄王、位につきて後、靳尚が讒につきて、【補入】○屈原〔八〕、五月五日に身をなげてしぬ。世の賢をもとめず、人をしらざるにぞなりにける。後に、妻の夢の中に屈原来て告て云、淵の中に龍集て、我食を奪へり。汝、飯を五色の糸してかざりて、龍の形のごとくして、五月五日をむかへて淵になげよ。龍はおそれてさりなん。我は知てうけんといへり。妻、夢の告のまゝにとゝのへけり。楚国の人、けふことに屈原をまつれり。趙の襄王聞あはれびて、馳射をとゝのえ、一日の宴を儲てまつれり。

むすぶてににごるしづくもある物をひとりすみける山の井の水（片128・平110）

【頭注】

随二其流一本

【補入】

屈原をすめられざりければ、しりぞきこもりにけり。

【校異】

（一）讒しければ ―― 讒しけれ（は歟）〈岸〉
（二）たのしめる ―― たのしへる〈岸〉
（三）こゝにこゝには ―― こゝには〈岸〉
（四）世みな濁らは、何に其塗泥【頭注】を掘て、其浪（波本）をあけさる。衆人みな酔らは、何そ其糟を ―― 世みな濁らは、何そ其塗泥を掘て其浪をあけさる。衆人みな酔らは ○何そ其糟を〈岸〉
（五）〈か〉（う）けんや ―― うけんや〈岸〉
（六）悠尓として ―― 〈條（朕）〉尓として〈岸〉
（七）○去ぬ（わらつてイ）。 ―― 去ぬ。○（わらつてイ）〈岸〉
（八）讒につきて、【補入】○屈原 ―― 讒につきて、屈原をすめられさりければ、しりそきこもりにけり。屈原〈岸〉

134 陸玩無人〈四五三〉

晋書（クワン）陸玩無人

陸玩は徳望人にすぎたりけれども、身をかずならず思なしてすぐしけり。時に王導、郗鑑、庾亮〔一〕うちつゞきうせにけるを、

世中に大におしみけり。おほやけ、陸玩を召て司空になされにけり。陸玩のがれ申せどもかなはず。人きゝつゝ問ければ、我其器にたらずして、すでに三公につらなれり。天下に人のなきににたりと痛みけり。きく人なを陸玩ばかりの人なしとぞほめける。

身のうへをなきになすこそかへりてはなごりもたかきこゝろなりけれ（片129）

あやにくに冬ごもりにし心こそ人にしすぎて春をしりけれ（二）（平111）

【校異】

（一）郗鑑、廋亮 ―― 郄鑑、庚亮〈岸〉

（二）春をしりけれ ―― 春をしりけれィ〈岸〉

135 賈詡非次〈四五四〉

魏志 賈詡非次

賈詡は位いやしかりしを、魏の文帝の人をこ超也してめしぬきて、大尉にうつされにけり。孫権これを聞て、人をしらぬ政をあざむきわらひけり。

くらゐ山みちなきみちとなりにけりふもとはみねにみねはふもとに（片130）

【校異】

ナシ

136 范冉生塵〈八九〉

范丹【傍記】生塵 【割注】

後漢の范丹、家まづしくして、甑の底には塵つもるまで柴おりくぶる営（イトナミ）をわすれ、釜の底の水には魚のすだくまであさげの煙たえはてにけり。まことに、心細くなんありける。

かきつめぬこの葉のちりはつもれどもやどのけぶりはたえはてにけり（片131）

わび人のやどのあさげにたつ煙たえてしもこそ心ぼそけれ（平113）

【傍記】

或作冉（ゼン）レ

【割注】

私云、范丹、字は史雲と云。為二莱蕪令（長本）一、家貧也。時人号曰二甑中一生レ塵。

【校異】

ナシ

137 孫晨藁席〈四〇三〉

三 補決録 孫晨藁席

孫晨、家貧くして、冬の月に衾なかりけり。僅に藁一束ありけるを、くるればふして、あくればかくしをきけり。

すみわびぬわら屋のとこのさむしろにこゝろにもあらずよをのこしつゝ（片132）

【校異】
ナシ

138 君平売ト〈三六六〉

君平売ト

厳君平は蜀都の人也。おほやけ、頻にめせども、世をうき物に思とりてつかへず。売ニトヲ、城都の市にて日々に百の銭を取て、肆（イチクラ）をとぢて簾をおろしてぞすみける。烏帽子をいたゞきて墳典をたづねて栄禄をもとめず。

みやこより心のうらを（一）たのみきてうるまの市に身をかくしける（（片133））

【校異】
（一）心のうらを ―― 心の〈そ〉らを〈岸〉

139 孔伋縕袍〈二九九〉

説苑 孔伋縕袍

孔伋、家貧して縕袍おもてやれてうらなし。十旬に九たび食しけり。田子方と云人、狐の白裘（一）をおくれり。孔伋が云、我聞く、人にをくる物をば不肖ノ者是をうく。みぞにすつるがごとし。我身は雖レ無レ徳、あへて身をば溝とはおもはずと云て、終に返してけり。

十旬は十日也。明王不レ受ニ咫（尺）○之玉一、而愛（受イ）ニ一寸之旬ヲ一、々（間々イ）猶レ時也。

そらさゆる雲のころもをあまつかぜこゝろづよくもふきかへしけり（（片134））

【校異】
（一）狐の白裘 ―― 狐白の裘〈岸〉

140 田方簡傲〈四一八〉

史記 田方簡傲

田子方、魏にゆく。魏太子迎ニ於郊一ニ。子方、車よりおりずして奢れるさまなるを、太子とがめて云、貧賤にして何以か驕（オゴル）レ人乎と。子方答云、以ニ天下一驕トキハレ人、失ニ天下ヲ一、以ニ富貴ヲ一驕トキハレ人、失ニ富貴ヲ一、唯貧賤にして可ニ以テ驕レ人ニ。言不レ従一、行不レ合、則抜（抜イ）レ履適ニ秦楚一、安ソ往而不レ得ニ貧賤一哉。

又云、田子方は魏の文侯之師也。文王、封ニ太子ヲ於ニ中山一ニ、路逢フニ子方一ニ。下レ車ヨリ礼謁す。子方、不レ為レ礼を。太子不レ悦 問曰、富貴ナルモノ者驕レ人ニ乎（カ）、貧賤ナルモノ者驕レ人乎（一）。子方曰、国君として人におごれば、則其国をうしなふ。大支（一）として人におごれば、則其家を失ふ。貧賤の者は行不レ合ゝ、○言（ず）不レ用、則○安往而不（ザラン）レ得貧賤ヲ乎。

【傍記】

とがめずはこゝろのみちをしらましやゆきあふさかの関のたび人（（片135））

あは雪の世にふるかひはなけれども身をさへいかゞ思すつべき（（平117））

【傍記】
去テ之ニ越楚一本

【校異】

（一）驕レ人乎 —— 驕人哉〈岸〉
（二）大支 —— 大夫〈岸〉

141 郤詵一枝〈四五〉

郤詵【傍記】（一）一枝

晋の郤詵（一）、字は広基、賢才世に聞えて、対策天下第一也。武帝、郤詵（二）に、汝が才の賢きこといくほどにか（三）思と問給へり。郤詵（二）申云、臣、挙ラレテ二賢良一、対策為タリ二天下第一一。しかはあれども、猶桂林之【頭注】一枝、昆山之【頭注】片玉のごとしと申〈な〉り（三）。詞場ニ折レ桂ヲ、これよりはじまれり。

ひとえだの月のかつらといひなせどよにあまりけるひかりなりけり（片136）

【傍記】
郤詵

【頭注】
折桂初

【校異】
（一）郤詵 —— 郤詵〈岸〉
（二）いくほとにか —— いくほとゝか〈岸〉
（三）申〈な〉り —— 申せり〈岸〉

142 田豫倹素〈四二九〉

魏志田予倹素

并州の刺史（一）田予、清約素倹にしておほやけ被ニ宛行一賞賜をば、みな将士にわかちあたえけり。身を後にし、人を先にする心のみぞありける。

いにしへやわが身にまさるものなしとおもふ人だにありときゝしか（片137・（平119））

【校異】
（一）刺史 —— 判事〈岸〉

143 晏嬰脱粟〈九〇〉

晏嬰脱粟 【割注】

晏嬰は斉国の人也。をごりをいとひ、賤を好けり。常に食ニ脱粟ノ飯一ヲ。食シテ不レ重レ味ヲ也。斉の景公、晏嬰を使として楚国へつかはされけり。楚王、晏嬰が智弁の程を聞て、〈誠〉（一）とおぼして、潜に人をしばりて（二）殿の前に置て、そらしらずして何ものぞと人にとはるゝに、斉の国のものゝ盗したるを召いましめたるなりと申せり。楚王、斉の国の人はぬすみする事にてあるかと晏嬰に問給に、答申て（三）、きみ聞給へ。江南の橘の木を江北にうつしうふれば、其木、枳束となれり。水土のことなる故也。人も斉にある時は（四）盗をせねども、楚に来てかくならへり。明に知ぬ。土俗のしからしむるなるべしと申せり。王及ビ左右の人、大に恥てこたふかたなし。

脱粟は纔に脱粟而已、不ニ精鑿一也。説苑云、晏子曰、合升斗之穀以満ニ倉廩一、太山之高非ニ一石一也。累リニ〈昇〉然（五）後ニ高也。夫レ治ニ天下一者ハ、非レ用ニ一士之言一也。晏子、一日にみたび斉景公をいさめき。景公、やまひ重くなりてのころ、晏

嬰、一日にみたび我をせめき。いまたれかわれをせめむとぞ心ぼそくきこえける。

あはづのゝくさばがするにかゝりても露のいのちはながらへぬべし（**片138**）・（**平120**）

【割注】

私云、晏嬰字は平仲、斉の相たり。

【校異】

（一）〈誠〉―― 試〈岸〉

（二）しはりて ―― しんりて〈岸〉

（三）申て ―― 申て云〈岸〉

（四）時は ―― 時には〈岸〉

（五）〈昇〉然 ―― 卑然〈岸〉

144 叔敖陰徳〈一八八〉

賢誼新書 叔敖陰徳

叔敖は楚の相也。乗二桟車牝馬一三、冬は羊裘をき、夏は葛衣をきて、事にふれて倹約を好し人也。いとけなかりし時、遊に出て、両頭ある蛇を見て、殺てふかく埋てけり。かへりて母に向てなきゐたるを、母おどろき（一）問に、けふ両頭のくちなはを見つ。是をみたる（二）ものは即しぬと云事をきけりといひ。さて、其蛇をばいかゞしつると問ば、後の人のみて死む事をおしみて、殺てふかくうづみつと云けり。母の云、汝はさらに死べからず。後の人の皆しなん事をおそれて、ふかくうづみつれば、すでに陰徳あり。夫陰徳あれば必陽報あり。徳は不祥にかち、仁は百禍をのぞく。天は高にゐて卑をきくといへればなり。其後、叔敖、楚の令尹となりぬ。

こゝろありてふりたるゆきのうづまずは野べのをどろやあやぶまれまし（**片139**）

【校異】

（一）おとろき ―― おとろ〈岸〉

（二）みたる ―― みる〈岸〉

145 柳下直道〈一八七〉

論語 柳下直道

柳下恵、字は展禽、家に柳あり。身に恵徳あり。この故に柳下恵とは名づけゝり。魯の典獄官として、道をなほうして（一）仕ふるに、群邪、これがすなほなるをにくむゆへに、みたびしりぞけられにけり。或人、魯の国をばさるべからずやと問ければ、世皆邪也。道を直して人につかへば、いたらむ所の国いづくにしてかみたびしりぞけられざらん。身をまげて人につかへましかば、魯にありてしりぞけられざらまし。何ぞ必しも父母の所居（二）の国をさらむやとぞ答へける。

かひなしや人もすさめぬやなぎかげこゝろひとつのみちはあれども（**片140**）

あきらけき心のみちもかへりてはくらきにまよふうき世とぞみる（**平122**）

【校異】

（一）なほうして ―― なほくして〈岸〉

（二）所居 ―― 所〈其居〉〈岸〉

146 季布一諾〈一〇九〉

前漢 季布一諾

季布将軍は楚人也。一言の信を変ずる心なかりき。そのかみ窘タシナ漢祖ヲ、々々、天下をとりてうらみをのこしけれども、季布へつらひしたがふ心なくして、属朱家ニ、かくれゐにけり。後に思ひゆるして、為シテ郎、はなはだをもくせられけり。時の人の諺に云、

得エヨリハ黄金百鎰ヲ、不ジ如ニ季布ガ一諾ニハ。

たのもしなうつろふよゝにうつろはぬおなじときはのまつのこゝろは（**片141**）

【校異】

ナシ

147 荘周畏犧〈四〇〉

荘子 荘周畏犧

荘周（一）は楚人、天下にすぐれたる賢者也。楚王、使をつかはし相とせんと被レ仰ければ、荘周（一）、使にあひて云、汝○犧牲をみずや。始めは繒綵【頭注】をきず、葭芻を飼へども、終にはひきて太廟に入て、孤犢（二）となりぬ。我犧牲のためしにならじと云て、深くこもりゐにけり。

荘周（一）は夢の中に胡蝶となりし人也。

ときをまつおなじひつじの身となりておもはぬかたにあゆむべきかは（**片142**）

【頭注】

本文

及ビ其牽テ而入ルニ大廟ニ、雖ドモ欲レ為ルコトヲ孤犢ニ、其可レ得ンヤ乎。

【校異】

（一）荘周 ―― 庄周〈岸〉

（二）孤犢 ―― 几犢〈岸〉

148 伍倫十起〈五四〇〉

後漢 伍倫十起

後漢の第五倫、字は伯魚といふ。ある人問云、君ニ有リヤ私否哉と問。予云、我兄コノカミの子ありき。昔病せし時、一夜に十たびおきて見とぶらひて、退き帰て則安て（一）ゐねられき。我子、病する時、行てみずといへども、よもすがらねられずして歎あかす。是をもてこれをはかるに、私なしといはんやと答へけり。

おきふしてとかへり人をとふよりもこを思ふことはやすむまぞなき（**片143**）

【校異】

（一）安て ―― 安く〈岸〉

149 子罕辞宝〈一五八〉

左伝 子罕辞宝

宋人、ひとつの玉をもちて子罕にあたえけり。子罕うけずして云、我、汝が玉をとらば、汝が宝もうせなん。われ人の物をむ

さぼらぬを宝とせし心もむなしくなりなば、汝も我も宝うせたるがごとしと云て、玉をかへしてけり。

よせくればなみにかへしていせの海のきよきなぎさに玉もとまらず（片144）

【校異】

ナシ

150 朱家脱急〈三三四〉

前漢 朱家脱急

魯の朱家は高祖の時の人也。魯の人、悉に交りむつびけり。朱家、世に仕へて事を行に、とがあるものをかくしいけたる事、何百人といふ事をしらず。人のあやまちをたすけはぐゝむ心、をのが身の事よりもふかゝりけり。季布将軍があやうかりしをばたすけしかども、富貴の後はとはずぞありける。関より東の併人供歟（一）、くびをのべて是にまじはらむ事をこひねがひけり。

こをおもふおやにもすぎてふかゝりきしるもしらぬもすてぬなさけは（片145）

【校異】

（一）併人供歟 —— 人併〈岸〉

［附記］

本翻刻は、二〇一二年度大阪大学日本語日本文化教育センター特別研究費（Ⅱ）の成果の一部である。原本閲覧・翻刻掲載の許可を賜った山口県立山口図書館に厚く御礼申し上げる。また、人形寺英利子氏には校正の過程で多大な協力を得た。ここに附記し、深謝申し上げる。

（あお　あすか・日本学術振興会特別研究員ＲＰＤ）
（こやま　じゅんこ・天理大学文学部准教授）
（たけしま　かずき・立命館大学文学部非常勤講師）
（つた　きよゆき・大阪大学日本語日本文化教育センター准教授）
（なかしま　まり・洛星中学校非常勤講師）
（はまなか　ゆうこ・京都学園大学人間文化学部非常勤講師）
（もりた　たかゆき・南山大学人文学部講師）
（やまなか　のぶゆき・本学文学部非常勤講師）